

# 私立 千歳科学技術大学

## プログラムの名称

自ら成長する教養人の育成支援プログラム  
—アナログ・デジタル両手法を活用した成長度に応じた能動的キャリアアップ・人間力涵養システムへの変革

## プログラム担当者

総合光科学部教授・学生総合センター長 角田 敦

## キーワード

1. 学生総合カルテ
2. 成長する教養人
3. アナログ的手法
4. デジタル的手法
5. 表現力養成講座

## 1. 大学の概要

千歳科学技術大学は理学と工学を融合したカリキュラムの下、教育・研究を行う理工系の単科大学として、1998(平成10)年千歳市による公設民営の方式で開学した。本年4月には、10周年を機にさらに広く社会ニーズに応えるため、総合光科学部及び3学科の体制に改組している。本学は「人知還流・人格陶冶」を建学の精神として掲げ、教育・研究はもとより学生支援もこの精神に基づいている。大学で育んだ人材と知的成果を広く産業社会や地域に還元し、更に大きく成長した人と知を大学に還流させ、次の萌芽とする。また、全ての学生・職員・教員が人間性を高め、主体性と協調・共生の精神を学び合う。本学は開学当初から「自ら学ぶ学生の育成」を目標とし学生支援に努めてきた。実験・実習・演習をカリキュラムの中心に位置付け、教育支援にティーチングアシスタント(TA)を、ICT技能の支援にメディアコンサルタント(MC)を配置し、きめ細かな体制をとっている。

これらの取組が高い教育効果を生むことに着目し、本学では学生を主体としたe-ラーニング教材の開発(特色GP、2003(平成15)年度採択)、学生を主体とした理科教材の開発とICT教育の実現(現代GP①、②、2004(平成16)年度採択)を開始した。参加学生はプロジェクトメンバー(PM)と呼ばれ、これらの取組は学外から「千歳モデル」として高い評価を得ている。更に学習カルテの構築(現代GP③、2007(平成19)年度採択)へと取組の拡充を進めている。人材の還流については就職率100%を目標に、教職員が一丸となつての就職先の開拓、キャリアアップ教育などの支援に努めてきた。ここ3年間は就職率(進路決定率)95%以上を維持し、「就職に強い大学」との評価を得ている。更に卒業生が社会人学生として本学大学院に入学するなどの形で人材の還流も実を結びつつある。

## 2. 本プログラムの概要

学生にとって、基礎学力・専門知識に加え、職場や地域社会から求められる社会人基礎力を身に付けることが本学の教育理念実現への道程であり、教員及び職員の指導・支援の下に学生自らが能動的に行動し、真の教養人へと成長していくことが重要である。この課題に対し本プログラムでは、在学年次を問わず学生個人の成長レベルに応じて、学生がキャリアアップを図りつつ様々な角度から自分自身を見つめ、社会ニーズを経験を通して理解する機会を与える。併せて個別対応を中心とした学生ニーズの把握とフォローアップによるフィードバックによって、総合的な人間力涵養に向けて成長する教養人として学生を育成することを目指している。具体的には、教職員との対話や社会人基礎力を養う表現力養成講座等のアナログ的手法と、ICT技術を活用した学習指導・支援(学生総合カルテ)やSNS同窓会等のデジタル的手法を併せて活用し、より効果的な学生支援システムへと展開する。

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

本プログラムの骨子は、教員を主体とした指導的な支援(父親的な支援)、職員を主体とした温かく助ける支援(母親的な支援)、学生やOBを主体とした支援(兄弟的な支援)を縦糸とし、横糸としてICTを活用した情報の共有を行い、そこに個人面談を重視した各種のキャリアアッププログラムを織り込んだものである。また本取組は、本学の問題解決型プロジェクト学習の実績をベースに、キャリア形成や就職活動という全学的な問題解決型学習のテーマに対して、学生が自らの将来を見据えながら対応できるような先進的な学生支援プログラムを推進することで、自らの専門的職業人の意識をより具体的に持ちながら社会へ出られる人材(教養人)の「全学的な」育成を目指している。

本プログラムのねらいと構成を図1に示す。社会の

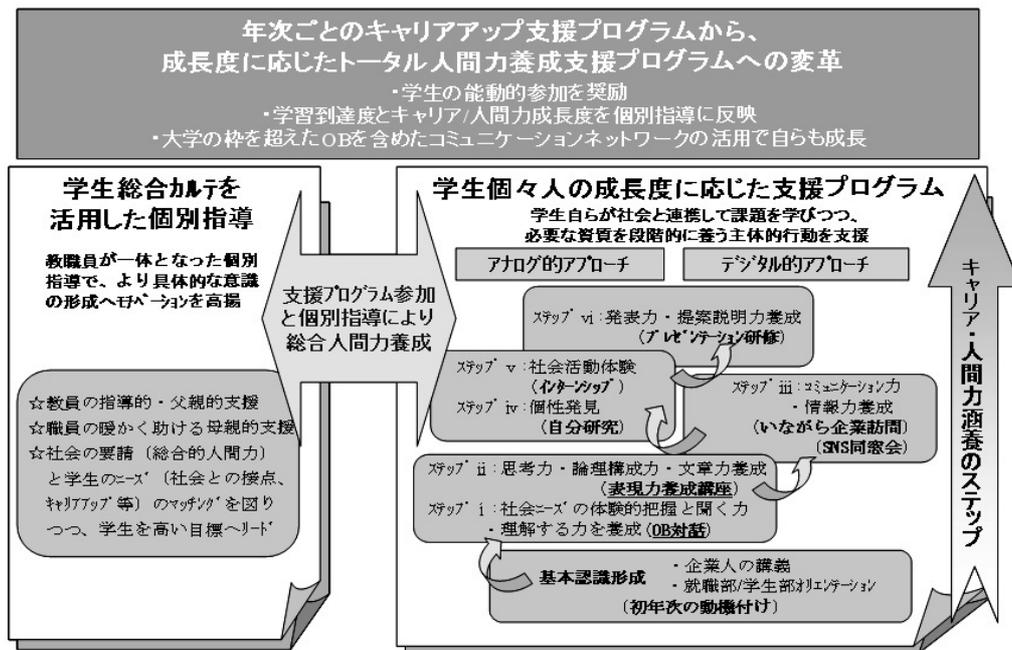


図1 学生支援プログラムのねらいと構成

複雑化及びグローバル化に伴い大学生に要求される資質は多岐にわたり、従来から必要とされてきた企画力（プラナビリティ）・挑戦力（チャレンジ精神）に加え、コミュニケーション力を含めた総合的人間力が強く求められる。また、学生の深い考察力・論理構築力が不足しつつある点も指摘されている。この背景に学生の聞く力及び理解力並びに言語表現力の衰退がある。本学は、学生の年次毎にキャリアアップ支援プログラムを実施するとともに、個人面談を重視した学習指導や就職指導を行い、「自ら学ぶ学生の育成」に取り組んできた。その成果は「就職に強い大学」・「面倒見が良い大学」という評価となって現れ、2007年及び2008年卒業生の就職率は全国3位（週刊読売ウィークリー誌）、面倒見のよい大学ランキングで全国10位（河合塾2007年6月27日資料）を達成している。しかし、社会の要請及び学生の指向は多様化が進み、社会ニーズや学生ニーズに従来以上のきめ細かな対応が必要となってきている。また、学生の資質形成に対する従来の支援プログラムは、大学側からの呼びかけによるものが主で、学生にとっては「受身の参加」であったことから、「能動的な参加」を主体としたシステムに変革を図る必要がある。

本学生支援プログラムでは、このような課題に対し、在学年次を問わず学生個人の成長レベルに応じた主体的アプローチでキャリアアップを図りつつ人間力を培い（教職員による支援）、また様々な角度から自分自身を見つめることにより、社会が学生に望むニーズを

自分自身の問題として経験を通して体得させる（OBを主体とした支援）こととした。併せて個別指導を中心とした学生ニーズの把握とフォローアップによるフィードバックによって、社会人としての総合的な人間力を具えた教養人に自ら成長する学生を全学的に支援するプログラムと位置付けた。

本学では、現代GP③「理工系学部での学習トレーサビリティ」と先導的教育情報化推進プログラム「ICT活用を通じた横断的な機関・科目連携に基づく理数系教育の実践と評価」が現在進行中であり、学習カルテの導入を始めとして、全学的に教育の質の保証を目指している。本プログラムの実施は、大学が目指すこの方向に学生のキャリアアップの面から一層幅広い充実を図ることになり、大学にとって極めて大きな意義のあるものである。

#### 4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

##### (1) 新しい発想や独自の創意工夫

本学生支援プログラムの特徴を図2に示す。

(i) 成長レベルに応じたアナログ・デジタル両面のキャリアアッププログラムの導入

本プログラムでは、キャリアアップの段階として6段階のレベルを設定し、年次毎に機械的に実施するのではなく、初年次の動機付けで形成される基本認識の基盤上にレベル毎のプログラムを用意し、2年次以降学生個々人が随時能動的に参加して自らの

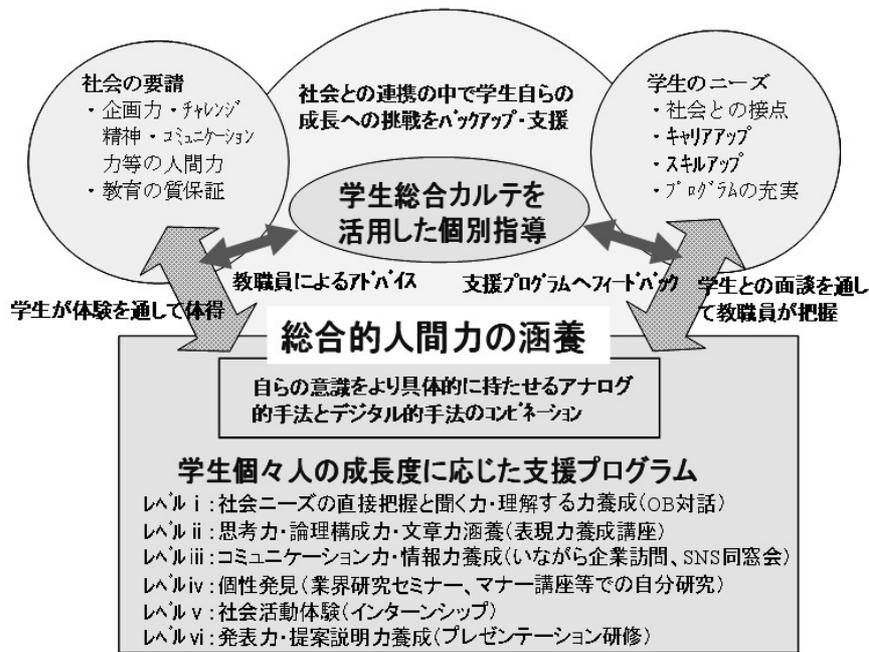


図2 本学生支援プログラムの特徴

人間力を養い、レベルアップを図ることとしている。レベル i (OB対話) では、本学OBとの対話から社会活動の実態や社会が大学生に望むニーズを理解し、レポートをSNS (Social Networking Service: 電子的な情報交流の場) に公開する。レベル ii (表現力養成講座) では、携帯電話やメールから隔離した環境下の合宿形式での「表現力養成講座」を実施し、文章を読んで理解力・思考力・書く力の育成を図る。この二つはアナログ的アプローチである。レベル iii (いながら企業訪問・SNS同窓会) はデジタル的アプローチで、SNS上のレポート等を基に自らが情報発信源として参加し、人的ネットワークを展開できるようにする。このため、ネット型同窓会をこのSNSで実現する。卒業生の情報交換を活性化すると同時に、卒業生と在学生との間にもチャンネルを開くことで、学生は卒業生を通じて居ながらにして社会的ニーズを直接的に把握できる機会、即ち「いながら企業訪問」が可能となる。レベル iv (自分研究) 及び v (インターンシップ) は、レベル iii までの経験を生かしてより深く自分の適性等を把握し、将来に備えた修練を積むものである。レベル iv (プレゼンテーション研修) は、企画提案やオリジナリティ主張に必要な資質を養成するもので、e-ラーニングと実習を併用したブレンド型の実践的講座により、高いレベルの表現力・コミュニケーション力を身に付ける。なお、これらの各プログラムは、学生の希望に応じて何度でも参加できることとし、学

生個人が納得いくまで研鑽を積むことを奨励する。  
(ii) 全学生の成長度を把握して個々の指導に役立てる学生総合カルテの作成と活用

学生個々人の履修コース設定状況や受講科目の達成度を把握できる「学習カルテ」をベースに、上記のレベルごとのプログラム等における取組状況や適性・得意とする分野等を加えた「学生総合カルテ」(図3)を電子的に作成し、厳重な管理のもと個別指導の原点とする。これにより、学生一人ひとりの成長度を適確に把握すると同時に、学生の個性を社会のニーズに様々な形で生かすことを目指す。上記(i)のレベル毎のプログラムにおける到達度は、学生個人の自己判断によることとするが、活動状況等を学生総合カルテに残すことにより、教職員との対話による面談の中から学生自身の自覚を促すように指導するとともに、成長度向上への支援に対するニーズも同時に汲み上げる。学生総合カルテを通じて学生は、教員との対話から将来の専門に向けたアドバイスを受け問題解決の方向性をもらうとともに、職員との対話から日常的な活動に関する支援を受け問題解決に「あきらめず」に取り組むことができる。

## (2) 他大学の参考となるポイント

本学生支援プログラムは、社会ニーズに応え得る学生の資質・人間力形成に関して、学生の能動的な参加と積極的行動を促すため、学生の多様なニーズの汲み上げと卒業生 (OB) との繋がりを有機的に結合させ

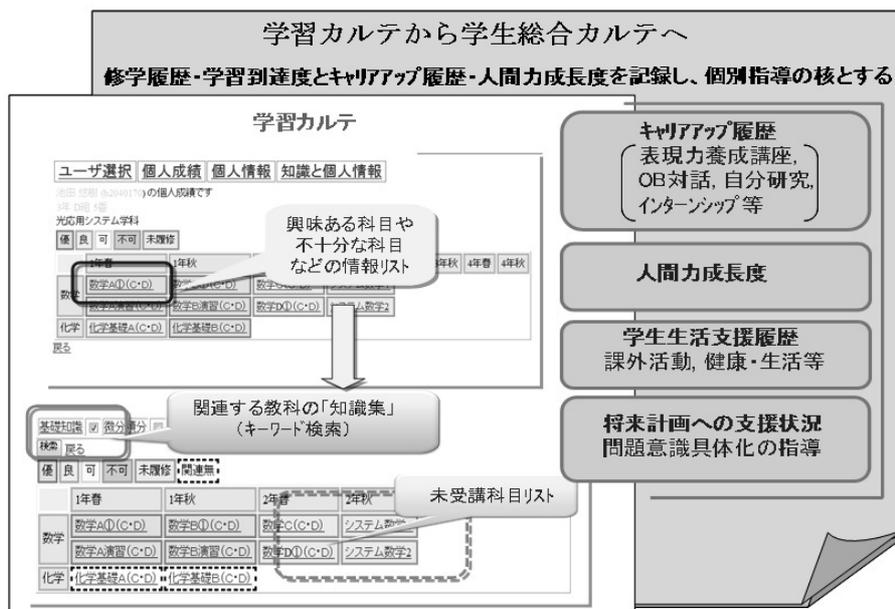


図3 学習カルテの取組と学生総合カルテへの展開

て支援するものである。企業の求人活動ではOBリクルーターが定着していることもあり、SNSの管理・運営、学生総合カルテの運用等について、明確なルールと学内体制の確立により他大学でも幅広く応用が可能と考える。

## 5. 本プログラムの有効性（効果）

### (1) 期待される効果

第一に期待される効果は、社会人として必要な人間力を備えた教養人に学生自らが成長しつつその資質を獲得することである。成長レベルに応じたアプローチと個別指導を中心としたフォローアップのポジティブフィードバックにより、一般知識程度に過ぎなかった認識レベルを、自らの能動的活動によって確かな認識へレベルアップすることができる。

第二に、OBも加わったSNSによって大学の枠を超えた自由な意見交換を行うことで、新たなコラボレーション機会の創出等の展開が期待され、広い視野で自ら将来を開拓する問題解決型へ成長できる。また、学習到達度とキャリア成長度等を記録した学生総合カルテによる個別指導を通して、方向性の明確化・モチベーションの高揚等が期待される。

### (2) 現在の学生支援の取組との見込まれる相乗効果

本プログラムは、従来の取組を大幅に拡充し学生・社会双方のニーズを強く意識した成長支援施策であることから、学生支援の質の向上が見込まれる。本学で

は、1教員当たり12名程度の学生を単位とするアドバイザー制度が2007(平成19)年度に発足しており、学生総合カルテは、個別面談を通して健康面や生活面の指導にも役立てることができることから、学生ニーズの把握とともに特にこのアドバイザー制度と高い相乗効果が期待できる。

### (3) 社会的ニーズ・学生ニーズとの対応

本プログラムでは、学生自らがOBらの生の声として企業情報を入手する。これと従来型のセミナー・インターンシップ等のプログラムとを併せて現実の社会ニーズを把握する。また、学生総合カルテは、卒業生の「質保証」のための学習指導に加え、個別面談を核としてキャリアアップの状況を記録することで学生ニーズの吸い上げを図る。これらを有機的に結合させるのが、「いながら企業訪問」及び「SNS同窓会」のSNSツールである。学生の能動的参加を促しつつきめ細かな支援が行えるよう、教職員の積極的な支援等には万全の体制で臨む必要があると考えている。

### (4) 教育活動や研究活動との関連性

学生全体の人間的資質向上と豊かな個性を育むために、本プログラムでは学生の自主的参加を極力促すことを心がけている。そのため学生総合カルテを有効に活用し、学生のチャレンジ意欲をかき立てモチベーションの持続を図る仕掛け（履修指導、卒論指導等）が必要と考えている。更に、学生総合カルテをFDツールとしても活用し、学生ニーズ等を大学の教育プロゲ

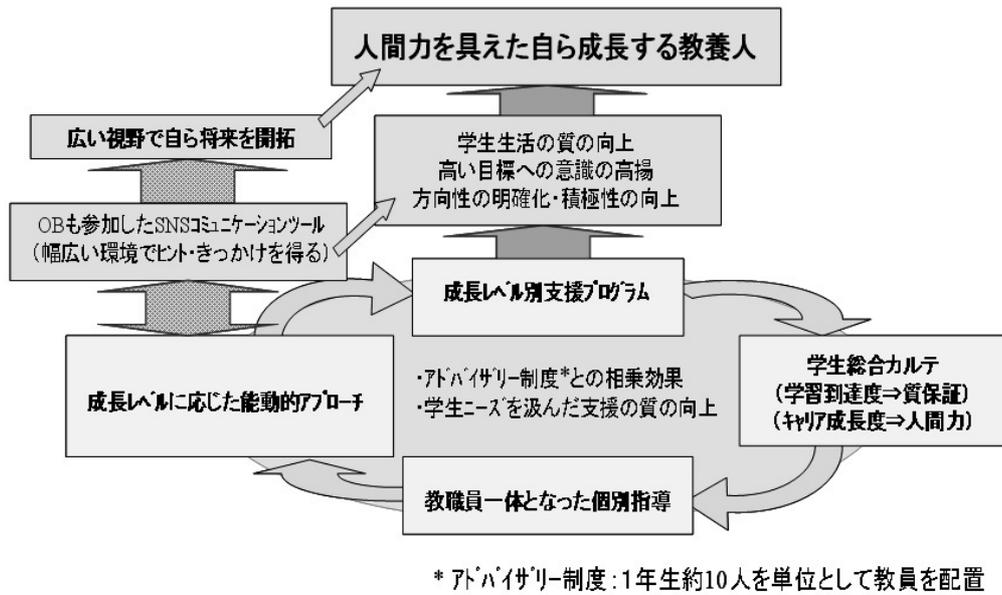


図4 本学生支援プログラムの働きと期待される効果

ラムにも積極的に反映させ生きた教育を推進する。

デジタルコミュニケーション力（アクセス数・書込・応答・提案等）

## 6. 本プログラムの改善・評価

### (1) 取組実施後の評価体制及び評価方法

校内の学生総合センターに、学長・学部長及び各部主任を主メンバーとした「学生支援プログラム評価委員会」を設置し、6カ月ごとに評価を行う。この評価委員会には外部有識者及び学生会代表各々若干名を加え、社会及び学生との連携に関する客観性を持たせる。SNSシステムについても同時に検証する。また、学生及びOBにアンケートを実施して取組へのフィードバックと改善に努める。具体的には以下の手順による。

- i) 半年に一度ずつ各プログラムの効果を点検・検証
- ii) 効果の大小の差についての分析と課題の抽出
- iii) 課題解決策を次年度プログラムに反映

### (2) 取組実施後の評価の観点

本プログラムは全学生が対象であり、実施状況・取組内容・結果・効果について以下の観点から評価を行う。

- i) プログラムへの参加（参加者数・満足度）
- ii) アナログ的思考性…イチかゼロかのみ判断ではなく文章表現や他人の発言の意味や意図を理解しその概要を的確にまとめたり対話することができる力
- iii) デジタル的資質…SNSを活用した情報発信・デ

- iv) SNS・いながら企業訪問・学生総合カルテの利便性・有効性

### (3) 評価結果の活用方法

半年ごとの評価に基づき学生総合センターの各プログラム担当部は必要な改善策を検討し、次年度の改善に反映する。また、年間に複数回実行するものは、関係教職員が参加して毎月開催する学生支援プログラム実行委員会に諮り、早期に改善を実施する。特に、SNSシステムについてはきめ細かに改良を図る必要があると考えている。また、学生総合カルテはFDツールとしても活用し、大学の教育プログラムにも積極的にフィードバックする。

## 7. 本プログラムの実現可能性・将来性

### (1) 各年度の運用実施計画（図5参照）

初年度は、本プログラムのインフラとなるSNSの構築と学生総合カルテへのキャリアアップ履歴の組み込みの検討を行い、試行により課題抽出及び必要な改善を図る。次年度に全体を試行しつつ改善を図り、3年度以降本格運用を図るとともに成長レベル別プログラム間の連携を中心に見直しを図り、新たな展開も検討する。試行及び本格実施に当たっては学生あるいはOBの要望等を追跡調査して検証と改善を図りつつ充実に努める。

	20年度	21年度	22年度	23年度
計画実施ステップ	インフラ構築 小規模試行  SNSシステム構築 学生総合カルテ 仕様検討	インフラ整備改良。 試行・評価・改善  SNS同窓会運用開始 学生総合カルテ試行	本格運用	継続運用 展開方針策定
成長レベル別 プログラム			全希望者に実施 成長度レベルの把握 学生総合カルテとの連動 個別指導の分析 評価に基づく改善	
CB対話	CB連携体制整備 講座の企画開発 小人数で実施	試行拡大 ニーズごとのマッチング分析 システム評価・改善		
表現力養成講座				
いながら企業訪問				
自分研究	3年生に実施 充実に向けて見直	3年生及び成長度の レベルに応じて実施		
インターンシップ				
プレゼンテーション 研修	講座企画・ 小人数で実施	試行拡大・実習の 充実・評価・改善		

図5 取組の各年度実施計画

## (2) 実施体制

本プログラムは、学生総合センターが中心となって、センターに関係する全教職員が専担あるいは連携して実施する。教務課・学習指導部とは随時連携を図る。「SNSシステム」の構築及び運用は、情報・メディア教育センターが担当する。各担当間の調整は、学生支援プログラム実行委員会で行う。教員は、中心的役割を担うほか、大学FD委員会・カリキュラム検討委員会など大学の他の活動においても、得られた知見や経験をフィードバックし、大学全体の教育理念・目標の実現に貢献する。

## (3) 補助期間終了後の展開

本プログラムは社会ニーズ及び学生ニーズに対応した学生支援プログラムとして、学生総合センターを核に継続的に実行していく予定である。プログラム終了後も定期的に評価を実施し、常に変化に対応して改良していくとともに、卒業生の追跡調査も実施したい。同時に、SNSのあり方、サポート体制なども常に見直しを行い、生きた学生支援プログラムを提供し続けることが大学として最も重要であると考えている。

## 選 定 理 由

千歳科学技術大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を5年以上に渡り具体的かつ組織的に実施しており、その結果は、e-Learningや千歳モデルにおいて実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。

また、今回申請のあった総合的な人間力を備えた教養人に自ら成長する学生を支援する取組は、学生の成長レベルに応じて、アナログ的、デジタル的両面から支援するプログラムになっており、多くの学生のプログラムへの参加が期待できるものと評価されます。また、支援を通じて学生が成長する様を「学生総合カルテ」を作成して個別指導により個々人の状況を的確に判断する環境を整備されることは、上記取組を実質的な効果と結びつけるものであると評価され、全体として他に見られない工夫ある優れた取組であると言えます。

更に、貴学では、従来から自主開発のe-Learningシステムや「知識集」などの独自の教育方法を採用して、学習到達度の確認を行う独自の手法を開発し、意欲的に学生の支援策を展開されており、本申請の取組がこれらの教育支援システムと有機的に連携して効果を発揮することが予想され、今後の展開が十分期待される取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。